

山下先生に学んだこと・「個々の学習意識を大切に」

池田 稔幸

一 はじめに

二〇〇二年度から新学習指導要領による教育課程、授業実践が全面的に始まる。戦後第六回目の全面改訂になるのだが、そのための移行期間が平成十二年度から始まる。私が教職に就いてからは、三回目の全面改訂である。これまでの改訂とそれに伴う授業改善、それらと比較して、今回の改訂に伴う授業改善がどのような方向に動いていくかを、自分の体験を通して考えてみたい。私の経験を振り返ったとき、どうしても学習指導要領の改訂に伴う「特色」に振りまわされてしまった感があるからだ。

私が教職に就いたのが昭和五十一年、その翌年、昭和五十二年に小学校学習指導要領が第四回全面改訂として告示された。「人間性豊かな児童の育成」、「ゆとりと充実」がスローガンになったことを覚えている。国語科においても、教材の精選、つける力の明確化、書く力の重視などが盛んにいわれた。次に

体験した改訂は、平成元年に告示されたもの（現行の小学校学習指導要領）だが、低学年に生活科が新設されたこと、「基礎・基本の重視」「個性伸長」などと合わせ、国語科では指導内容が四領域から二領域に改められたことが大きな特徴であった。それとともに、「理解」「表現」の関連指導が各地で実践発表され始めたことをよく覚えている。あたらしい二領域内のそれぞれの関連指導と、二領域間の関連指導の混同を心配したのがこの頃だったと思う。

そして迎えたのが、今回の告示である。「生きる力」、「伝え合う力」、二領域から三領域へ改められる。国際化、情報化、高齢化など、社会の変化に対応する内容が目を引いているが、「総合的な学習の時間」にかかわる調査活動やまとめ・発表場面を考えると、国語科がになう役割が益々重要になってくる気がする。

こうした改訂のたびに、店頭にはそのときどきの、改訂の特色が大きく張り出され、著名な先生方が書かれた本が所狭しと

並べられる。村部に赴任することの多かつた私は、用があつて町に出かけるたびに、書店に立ち寄りつては何冊か購入した。そして、これがすべてと思ひ込んで、あたかも流行を追いかけるように、自分の授業に取り入れようとしたものだった。今考えしてみると、根っこを広く、深くはろうとせず、背伸びをして見た目の葉っぱばかり増やそうとしていたような気がしてならないが、本誌の性格上から考えると、私の思ひ出話を載せることの適不適を判断できないが、山下先生との思ひ出を交えて、そのときどきの授業について振り返つてみたい。

一 新任地での「書き込み学習」

私の新任地は伊那市立美篤小学校で、現在は宅地がずいぶん広がり、田んぼが減つてしまつたとお聞きしている。三年生の担任として着任したが、国語の先生としては見ていただけなかつた。若いということだけで体育の係であつた。私が美篤小学校で国語の研究授業をさせていただいたのは、四年後のことだった。それまで国語の指導主事等をされていたT校長先生が、今年でおそらく転出するだろう私に、「国語の研究授業をしますか？校内研究ということなら私が見ましよう。」とおっしゃつてくださり、四年目にしてやつと国語の研究授業をすることができた。

このころ、学習指導要領が告示され、その移行期間に入つてきた。豊かな人間性を育てることがスローガンにあげられ、学校生活全体にゆとりと充実を生み出すことが求められた。国語科では、教材の精選とともに「書くこと」が特に重要視され、作文力の向上が課題とされた。教職に就いて初めての改訂でもあり、郡市の教育課程説明会で詳しい説明をお聞きしたり、I小学校の公開授業を見せていただいたりと、自分なりに新学習指導要領への具体的な対応策を考えたいように思う。その中で、書くことをもとにして話す力を伸ばす試みを振り返つてみたい。

当時、私の担任する学級にM君という、わりと口数の少ない子がいた。スポーツはまんべんなく好きで、とても明るく、級友からの信頼も厚い子だった。彼は、話すことが得意ではなく、話の途中で詰まつてしまふことが目立つたのを覚えていた。話す力を伸ばすためにはどうしたらよいか、その時の私の答えは単純すぎる考えだった。話の筋道や、内容の概略を書いておき、それをもとにして話せば、最後まで詰まらずに話せるだろうと考えたのである。

一口に書いたことをもとにしながら話すと言つても、その場面は様々だ。当時をご存知の通り、上伊那では文学を中心にした作品研究会がたいへん盛んであつた（現在も上伊那国語同好会の活動は層が広がって充実しているとお聞きしている）。月例会や夏季研修等で、作品研究の具体を先輩の先生方に教えてい

ただいたり、一人前のような顔で意見を言ったりしたことがなつかしい。そこで、私は、文学的な文章教材における心情の読み取りに焦点を当て、「書き込み学習」なるものに取り組むことにしたのであった。教科書教材でいくつか試みた後、二年あまりたつて、教科書に掲載されていない『きつねの窓』（安房直子・作）という、幻想的な児童文学作品を選んで、書き込み学習のまとめをしようとした。今になって考えると、M君の好みは説明的な文章教材であったのに、細切れにすると作品の持つ叙情感が薄れてしまうのに。

書き込み学習は、教材の行間等へ、自分で感じ取ったことや疑問に思ったことなどを、自由にメモしながら読み進める。もちろん、書き込んだことを修正するもよし、付け足して補充していくもよし。記号、色、線種等もそれぞれの必要に合わせて工夫するようにした。M君をはじめ、子ども達はそれぞれがもった感想や疑問、分かったことなどを、教科書の行間や余白へ書き込んでいく。

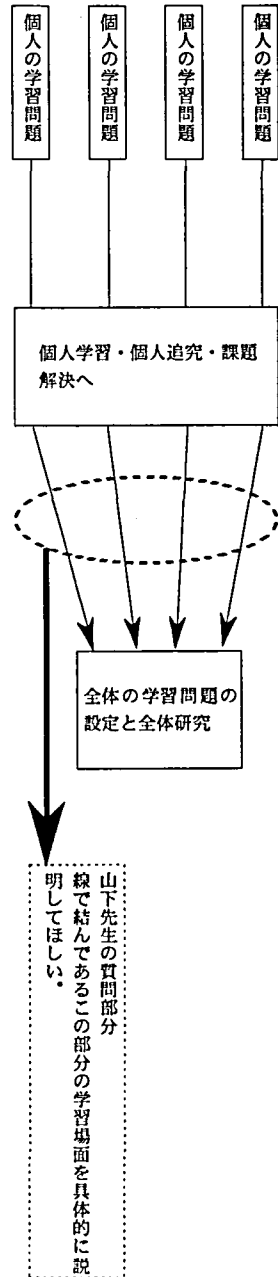
確かに、書き込み学習はそれなりの効果をあげたと思つていゝ。話すことが得意ではないM君をはじめ、発言の長さがそれまでに比べて長くなつたことを覚えていゝ。また、いわゆる「叙述を根拠にして」といふ発言が増えたことも確かだつた。そして一方では、話すことに抵抗のない子どもたちも、自分の考えに自信を持つて発言するようになったことも確かだつた。

結果的に発言のし合いではなく、話し合う学習が生まれるようになった。

ここで失敗したのは、その後の教材も書き込み学習主体で実践を続けてしまつたこと、このために子どもたちが国語に飽きてしまつたのだつた。担任していた当時の子どもたちが大変すまない思いをさせてしまつた。国語が好きだつた子どもはもちろん、M君のようにどちらかというと算数・理科が好きだつた子どもたちにも、ますます国語嫌いの気持ちを残してしまつたように思う。目の前の子どもたちの興味関心や地域の素材を教材化し、子どもの学習意識にのつた授業ということに目が向いたのは、その後転任した柴村の小学校だつた。

書き込み学習を基本にして、個人の問題追究から全体学習へ発展させる授業展開について「長野県国語教育学会」の研究協議会で発表したことがある。そのとき、研究会上におられた山下宏先生から質問が出されたのを、つい昨日のように覚えていゝ。

山下先生から出された質問は、左図のような学習の流れの中の太線部分についてである。



個人学習で個々の学習意識を大事に位置付けているのはよく分かるが、個人から全体に移るとき、「発表では線で結んであるのだが、この線で結んだ学習場面を具体的に説明してほしい。」という内容だった。質問を受けた瞬間、よりよくなってんで私の発表で質問するのか、そしてまたなんで一番いやなところを取り出して、と思った。

実際には、個人学習で残されたものを出し合い、お互いに教え合い、対話し合いながら全体学習の席でみんなで考えたい問題を絞っていったのだが、その時の私はうまく説明できなかった。そして、山下先生から、「子どもたちの学習意識を大事にしながら国語の授業を進めていかないと、国語嫌いの子が育ってしまいます。先生の考えをもとにして子どもを引っ張っていくような授業は改善していった方がよい。」という内容のご指導をいただいた。口先だけで「子どもの学習意識を大事にした

がら」といっても、研究テーマで「一人一人の子どもに」と唱えても、実際授業の中で具体的に「大事にすること」を実現するのは至難の業だということを痛感した私だった。山下先生のご指導は、その後の私の授業改善（国語以外の授業でも）の支えになったといってもよいだろう。

三 地域素材の教材化

(一) 教科書外教材の取り入れ

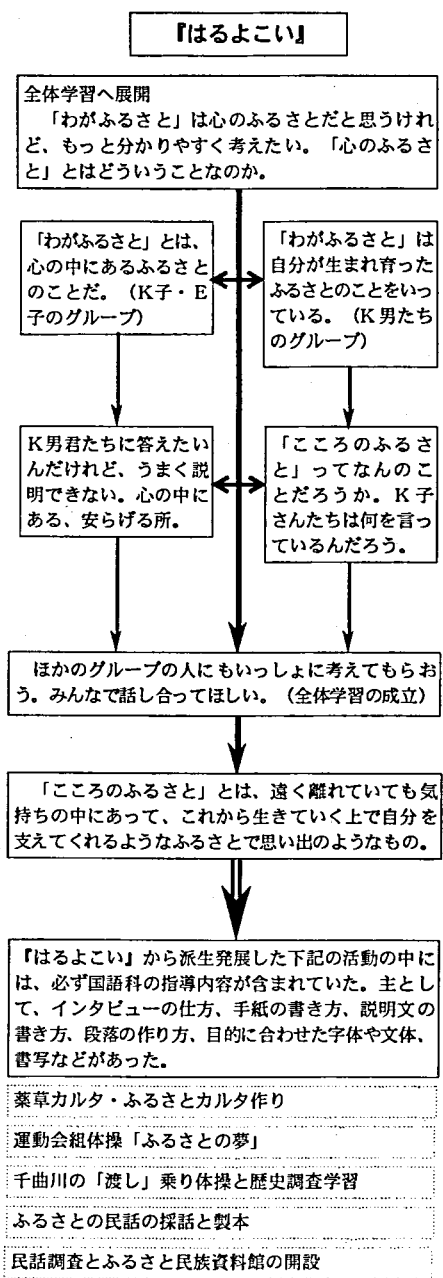
私が二校目に赴任したのは下水内郡茶村立北信小学校だった。当時は全校児童百二十名くらいで、もちろん単級であった。「五六豪雪」と言われた年だった。そこでの三年目、五年生の担任をしていた頃の授業について少し触れたい。

あるとき、私は、はまみつを先生が書かれた長編児童文学の

単行本『はるよこい』（偕成社）に出会った。北信濃、特に飯山市・栄村を舞台にしたと思われるこの作品を読み、そこに出てくる人々のひたむきな生き方と純朴な心のふれあいにもなんとも言えぬ感動を覚えたのだった。私は、担任していた五年生十五名にぜひ読み味わわせたいと考えた。とりあえず、物語の導入部分を子どもたちに読んでもらい、その反応を見ることにした。自分たちの実生活そのもののような舞台設定の中に、全員が興味を持つためのめり込んでいった。続きを読みたいという希望があふれ、一人一冊用意して授業時間に読み進めていくことにした。年間計画を大幅に修正し、国語の教材として位置付け

たことが、結果的に、子どもたちの学校生活をがらっと変えてしまった。そして、私自身の教師としての生き方をも変えてしまったといつてよいだろう。

ところで、今回の学習指導要領改訂に伴う「総合的な学習の時間」にかかわり、当時の『はるよこい』の学習は、総合的な学習の時間の内容に近いものだったのではないかと考える。それは、国語科の学習『はるよこい』から発展した活動が次のようなものだったからである。見ていただければ、なるほど分かっていたかもしれない。



肝心の国語学習の方であるが、『はるよこい』一冊を使った授業は何ヶ月にも及ぶ。当事指導主事をされていたS先生のご指導によって、各章毎に軽重をつけ、国語科の指導内容にかかわる章と、読書指導的な扱いをする章と、自由読書にする章と、それぞれ分けたりどうかというアイディアをいただいた。そうすることによって子どもたちの活動もぐっと弾力的、拡散的になっていった。国語科としての学習活動と、総合的な学習としての活動と、両者の違いが明確になったのである。もちろんどちらとも互いにかかり合って進行してはいたのだが。

以前山下先生にご指導していただいた「個の学習意識を大事にする授業」は、この『はるよこい』の中で深く考えることができた。というのは、今までグループ学習ということに対して不勉強であった私だったが、問題別グループによる学習過程を組み込み、全体学習に至るまでのステップを連続させることができたのだ。各章毎に進める学習の中で、典型的だった場面を例にあげてみる。本文中に出てくる「わがふるさと」という言葉にかかわる2つのグループが全体に問い掛けていく場面である。

個別の問題追究 **問題別グループ内での学習** **問題別グループどうしの話し合い** **全体への投げかけ** という過程で内容を

読み取り、登場人物の心情を考えていった子どもたちであった。この学習過程だけで「個々の学習意識を大切に」できたとは思

わないが、当時の自分として一つの打開策的な学習形態を実現できたように思う。と同時に、このステップが、後の「個に依り個を生かす学習指導」へのきっかけになったのだ。

(二) 個々の見方を生かす文集

飯山の町は狭いわりには寺院の数が多い。飯山藩の対上杉氏政策で、長峰丘陵に守りの砦代わりとして多くの寺を配置したことや、代々の藩主の仏教信仰の厚さのためといわれている。かつては36カ寺、現在は26カ寺もの寺院がある。

そんな飯山のある小学校に赴任して、国語で詩の授業をしたときだった。「言葉のスケッチ」と称して、自然や建造物の美しさを、見たままの感動が伝わるように言葉で表現する活動をした。学級のテーマを飯山の寺とし、三十二名がそれぞれの寺を選んで毎週一回のペースで通った。ほとんどの子どもが住職さんと顔なじみとなり、上がり込んでお茶をいただく子どもも珍しくなかったのを覚えている。

歴史を語る山門の姿を言葉でスケッチしたり、あるいは、あじさいの花に囲まれた本堂の静けさをスケッチしたり、また、金箔が所々残っている御本尊の表情をスケッチしたりで、どの子どもも金曜日の午後を楽しみにしていた。こうした活動の中で、国語科としてどのような内容を指導すればよいのか、どんな力

をつければよいのか、そして、ここの学習意識・追究意欲を継続発展させる手だてはどうあればよいのか、ずいぶん悩んだ。

結局たどり着いたのは、子どもどうしがそれぞれのスケッチを読み合い、この書き方がとつてもいい、こうした方がいいのではないかと相互批評する場面を取り入れることだった。信濃子ども詩集や図書館の詩集などを資料として用意したことが一つの拠り所となった。私の方からこうした方がいいというのではなく、相談にきた子どもとは、個別にいくつかの言葉や表現を提示し、気に入ったものを選択するようにしたが、今考えればあれでよかつたのではと思つてゐる。「飯山スタンブオリエンテーション」を兼ねて、およそ半年間かけた言葉のスケッチは印刷製本の後、子どもたちの手に戻つていった。

反復法のリズム感、体言止の引き締まり、比喩の効果、連による構成など、いわゆる一般的な表現技法を、子どもたちの必要感の有無にかかわらず、教師サイドに立つて教えてきた私だったが、この詩作学習「言葉のスケッチ」の過程で、素朴な表現ではあるが、子どもたちが自らの必要感に基いて、互いの意見交換を通し、見たまま感じのままを書き言葉によつて表現する力を高めていったように感じた。山下先生のご指導「個々の学習意識を大切にすること、国語科としての計画的な指導とということの兼ね合いが難しいと感じたことも事実だった。この時、いっしょに勤めていた大先輩のS先生は、「求めすぎるか

ら教師サイドになる」と言われていたこともうなずけた。

目の前の子どもをよく見て、教えることを絞り込み、教えるべきときに学び取らせるといふことはかなり難しいことだ。この点から考えると、国語科の指導についてはまだまだ未熟だった。実際の作文指導の中で個々の悩みに応じ、個々のよさを生かしたり広げたりすることは、それから何年か立たなければできなかつた。

四 おわりに

始めにも述べたことだが、現行の学習指導要領で課題にあげられた書く力・文章表現力の向上は、確実に図られたのだろう。私も、短作文を取り入れたり、表現と理解の関連指導を試みたりしたときがあつた。それはせいぜい5年間くらいだつたと思う。そのうちに、改訂の目玉に関する書籍が書店の店頭から少しずつ目立たなくなつたように、私の国語の授業からも徐々に少なくなつていった気がする。そして、対話、会話、ディベート、コミュニケーション、スピーチといった、いわゆる話すことにかかわる活動が増えてきた。教育は普遍なるものと受け止めてきたのだが、何か流行のようなものが大手を振つてまかり通つていような気がしてならない。

時代が変わり新しい世紀を迎えようとしてゐる今、山下先生

からご指導いただいた「個々の学習意識を大切に」することは、それこそ普遍的なものであるし、かえってこれからの時代の中心になることなのかもしれない。個性を伸ばすこと、学校の特色を生かすこと、地域の特性に根ざすこと、これらの点から考えても、国語教室のみならず、教育活動全体の中で、子どもたちの個性的な発想や活動を引き出し、さらに拡充、組織化していくことが重要な課題になってくるだろう。そのためには、教師の在り方、力量がますます問われてくる。どの子も、生き生きと学び、学力や体力を高め、心を豊かにしていく「楽しい学校」を実現していく上で、山下先生の「個々を大切にする」とことが根幹に座ってくるように思う。学生時代、上伊那勤務時代、飯水勤務時代、附属長野中勤務時代と、今まで山下先生にご指導いただいたことから、「個々の学習意識を大切に」するということをエキスとして取り出し、それを銘として今後の教職を送っていきたいと思う。

末筆になりましたが、山下宏先生には、今後ともご健勝でご活躍され、変わらぬご指導をいただけますようお願い申し上げます。

(いけだ としゆき)

長野県総合教育センター 教科教育部国語科担当専門主事)